

英語発音とカナ表記

—カナ発音英和辞典を考える—

橋本光憲

—目次—

はじめに

- 1 日本英学史から学ぶもの
 - 2 その後の英和辞典と発音表記
 - 3 英語発音表記のあり方
 - 4 カタカナ発音表記英和辞典
 - 5 最近の論争と今後の展望
- おわりに

はじめに

この研究を始めたきっかけは、二つある。その一つ

は、海外の日本人留学生の英語発音の下手さ加減である。中には早く上手になる者もいるが、全般的に自信なげである。論者は中高年の米国大学院留学で苦労した経験がある。そこでの中国や東南アジアからの学生達を見ると、彼らはかなり癖のある発音であるが、自信を持って英語を話す。それに対して、日本人学生は発音は癖がないが、膨大な読書量をこなし切れないせいか、極力発音を控えるので、目立たない存在である。論者は、その一因を日本における英語発音指導の不十分さに求めている。

論者は、英国ノッティンガム大学院のMBAコースでJapanese Finance（日本の金融）を教えて3年目になる。受講者は、英国・ヨーロッパ人と日本人を含む

東南亜人十人前後である。ここでも、東南亜人の発言の少なさが目立つ。英文レポートについては、そこそこ書ける者もいるが、総じて上手とはいえない。筆記は今では英米でもまともに penmanship を教えていないのか、大抵が下手であり、試験問題の採点をする時に、癖のある大文字書きの文など、何とか判読するのが精一杯である。このような現象の背景に英語の難語 (difficult words) の把握の弱さの存在を指摘したい。

こういった問題意識で論者が最近着手した仕事に、英語難語記憶辞典の資料収集がある。論者は元々、ビジネス英語における国際コミュニケーション (International Business Communication) の研究に取り組んできた者である。その関連で、ESP (English for Specific Purposes), Occupational English, General English, Plain English, Phrasal Verbs 等を採り上げてきた。その点で、英語の難語の問題は General English あるいは Plain English とは対置されるものとなるが、反面、過去の研究と比較することで、研究上の新局面が開ける可能性も出てこようとの期待もある。

そもそも、英語の難語とは何だろうか。論者はかつて、General English の研究で定義のない世界に迷い込んだ経験があるが、難語 (difficult words) はそれほど難しくはなからう。問題はどうか難しいのか (difficulty

vs learnability) ということである。

ある本¹⁾によると『頻出語は覚えやすく、そうでない語は覚えにくい』との前提の上で、①スペリングの難しい語 (例、beginning)、②発音の難しい語 (例、thrive) ③統語法上特性のある語 (want に比べて wish)、④意味の似ていると思える語 (make と do)、⑤ (ヨーロッパ人などにとって) 英語とスペルが似ていて、意味が違う語、⑥文化的背景の異なる語 (例、solicitor、chaplain、estate agent など) であり、こういった語は不十分な理解のままに終わることが多い、という。

論者が目指す英語難語記憶辞典、商品名としては、難語に限らず読書に必要な主要英単語を含めた『英単語完全マスター辞典』(記憶を重視する) には、次の五つの特徴を盛り込みたいと考えている。

1. 発音 (カナ発音表記) ・アクセント (特に第二アクセント) 重視
2. 語義の明示 (基本的意味と重要度順) と語法の解説 (記憶を助ける)
3. 必要な熟語と成句の完全収録 (必要事項は一冊で間に合うようにする)
4. 関連用語の収容 (基本語と相互補完的に意味の把握・記憶を助ける)
5. 語源の解説 (記憶の基本は語源的知識にあり、単

なる暗記は非効率)

以下の個別的な研究では、上記のような構想を側面的に支援する一方で、それぞれの問題のさらなる発展に資する結果となれば、論者の最も幸せとするところである。

1 日本英学史から学ぶもの

(1) 『英学事始』² から

上記書によれば、「英語事初」の発端を慶長5年(1600)に日本に漂着した英人ウィリアム・アダムスに置いている。アダムスは後に三浦按針として、徳川家康の知遇を得ている。(29ページ)その後の空白期間を経て、英日が接触したのは1808(文化5)年である。幕府は長崎の通詞に英語の学習を命じ、1811年には、最初の英学入門書『諸厄利亜(アンゲリア)興学小筈』を、1814年には、最初の英和辞書『諸厄利亜語林大成』を献上させた。(12ページ)

幕末の英和辞書としては、佐久間象山のすすめでフランス語を独修していた松代藩医の村上英俊が、学習の成果のひとつとして『三語便覧』³(1854)を刊行した。これは、日本語にフランス語、英語、オラ

ンダ語を対応させた単語集で、それぞれ発音をカタカナで原語にそえてある。オランダ語以外の西洋語が印刷されたのは、この『三語便覧』が最初である。(101ページ)

(2) ジョン万次郎と栗本市郎左衛門

一方、日米通交史にからんで、最近面白い本が出ている。『文久三年御蔵島英単語帳』⁴である。文久3年(1863)4月、伊豆諸島の一つ、御蔵島に漂着・座礁した米船バイキング号船長等と地役人、栗本市郎左衛門との約五十日に及ぶ記録が基になっている。同書の中で、多摩美術大学の佐渡谷紀代子氏ら⁵が「ジョン万次郎と市郎左衛門のカナ表記の発音について」論ぜられているのに、特に興味を持った。

そこで、「カタカナ表記の比較表」から、最初の数例を引用させて頂くと、次のようになる。

単語	意味	栗本	万次郎
sun	日	サンナ	シヤン
moon	月	ムーノ	ムウン「ムーン」
star	星	シターシヤ (stars)	シタアン「スター」
wood	木	オーダ	ウウリ

gold 金 ゴール
water 水 ワタ「ワータ」

万次郎（1827—1898）の十年近くのアメリ
カ生活と市郎左衛門の五十日を比較するのは無理があ
ろう。それにしても、「市郎左衛門の耳の良さと努力才
能には目を見張るものがある」と、佐渡谷氏は述べて
いる。論者も、全く同感である。

万次郎の四代目の子孫である中浜博氏は、『私のジョ
ン万次郎』⁶の中で、最初の英学入門書『諸厄利亜興
学小笠』（前出）と万次郎の著述の英語発音を比較して
いるので、以下に一部を引用させて頂いた。（130ペ
ージ）

天	heaven	ヘーベン	『諸厄利亜興学小笠』『英米対話捷徑』及び 『亜墨利幹詞』（写本）
火	fire	ハイル	ヘブン
水	water	ウアトル	サヤ
日	sun	シュン	ワタ
夜	night	ナイト	シャン
南	south	ソウス	ナイ
			シャウス或はソース

これについて、中浜博氏は、「目から入った英語（諸
厄利亜）と、耳からはいった英語（万次郎）の差が分
かる。万次郎の英語のコツは、早口で何度も繰り返し
いるうちにアメリカ英語になるという。」と、述べられ
ている。これらは、維新前後の横浜商人の言葉に相
通ずるものがある。メリケン波止場などは、今日にも
残っている言葉であろう。

(3) 明治以降の英語辞書

1. ヘボンと『和英語林集成』⁷
ジェームス・ヘボン（1813—1911）は、米
国出身の宣教師で、1859年来日した医学博士であ
る。1892年、帰国するまでの33年間、医療事業、
和英辞典の編集、その他、幅広く日本の近代化に貢献
した。慶応3年（1867）、8年の歳月をついやして
『和英語林集成』を刊行した。英和の部を含む、翻訳の
基となった辞典である。（講談社より復刻版が出ている。
同書はローマ字のヘボン式表記を確立したことでも有
名）

明治20年代から、ようやくヘボンにならぶ日本人に
よる辞書が出初め、ヘボンの影響を脱することができ
たのは明治40年代に入ってからのことだといわれる。
（『英語事始』139—142より）

2. 明治初年の英和辞書

堀達之助の『英和対訳袖珍辞書』⁸⁾(文久2年、1862)は、英和辞書の歴史を飾るものであるが部数が少なく、薩摩藩の洋学生達が上海で後身の辞書を印刷して日本に持ち帰った。これが『改訂増補 和訳英辞書』(明治2年、1869)で、英語の見出し語にカタカナ発音をつけたB5版700ページの、いわゆる薩摩辞書である。

その増刷では、発音を示すのに、カタカナにかえてウェブスター式発音記号を採用した。『大正増補 和訳英辞林』明治4年、1871)その後に刊行された英和辞書は、堀達之助あるいはヘボン(英和の部)の流れを行くものが多い。以降は、英漢字典、ウェブスター辞書、英国のNuttall英語辞書等を底本とするものが増えていくようである。『英語事始』195—199より)

ともあれ、英語発音が当初からカタカナ表記を主流としながらも、ウェブスター式の発音記号もいちはやく登場した事実には、興味が引かれる。

2. その後の英和辞典と発音表記

ここで断って置きたいのは、論者は3冊の実用英語辞典の編者であり、一・二の関連論考もある⁹⁾が、決して辞書学の専門家ではないことである。発音についてもほぼ同様であり、本論も外野席的発言になることをお許し頂きたい。

従って、明治に続いて、英和辞典の大正・昭和史について語るべきであるが、ここでは一・二の事例の寸描に留めさせて頂く。

(1) 大正の名著『熟語本位英和中辞典』¹⁰⁾

明治29年、正則英語学校を興した英学史に著名な斎藤秀三郎(1866—1929)の単独編集に成る英和辞典。大正4年(1915)刊。斎藤は『和英大辞典』(昭和3年、1928)も著している。(大村喜書『斎藤秀三郎伝』¹¹⁾参照)

『熟語本位英和中辞典』は、豊田実増補による新增補版が岩波書店から刊行されている。論者は、終戦(1945)直後の物不足の中で亡父が愛用していたこの辞典(改訂版、大正6年、カタカナ表記)を使い、またこの中に載っている英語の諺を集めてESSで発表したい出がある。

(2) 昭和の大著『富山房大英和辞典』¹²⁾

昭和に入つての大著に市河三喜・畔柳都太郎・飯島廣三郎の共著『富山房大英和辞典』がある。因みに、市川博士は修学時代、斎藤秀三郎の熱心な生徒であつたという。本書の編者である飯島の「はしがき」によれば、本書は明治34年頃に発意、37年起稿、畔柳、後に市川の参加を得て大正14年に到つて原稿完成し、昭和6年(1931)漸く出版されることになった、という。起稿より28年、約二千頁の大冊である。

発音は万国音標文字を使っており、10版、1953年まで刊行されている。

なお、昭和の大著としては、研究社の岡倉由三郎主幹『新英和大辞典』¹³⁾(昭和2年—1927、いわゆる岡倉英和)も採り上げるべきであるが、同辞典は改訂を重ねて今日に到っているので、次項で論ずることとした。

(3) 今日の英和大辞典

現在、日本で最も使われている英和大辞典は、前述の『新英和大辞典』第五版と、小学館の『ランダムハウス英和大辞典』第2版であろう。この二つを比較してみよう。

1. 『新英和大辞典』

この辞典は、1927年初刊、1936年第2版、戦争による空白期間を経て1953年大型第3版(市河三喜・岩崎民平・河村重治郎編集)、1960年第4版、そして1980(昭和55)年第5版(小稻義男主幹、全2、500頁)発行の歴史がある。

発音は米音を優先して、国際音声記号(International Phonetic Alphabet: 略IPA)を使っている。

2. 『ランダムハウス英和大辞典』

この辞典の初版は、1973(昭和48)年で、Random House Dictionary of the English Language, Unabridged Editionの初版(1966)をベースにしている。ランダムハウスが第2版が1987年に増補刊行され、日本側資料等を加えて、本辞典の第2版が1993(平成5)年発行された。旧版とは面目を一新した、まさに、「平成の大英和」といって全くおかしくない好著である。

発音は、研究社版と同じくIPAを使っているが、その中でも「日本およびヨーロッパ大陸の諸国でこれまで教育と辞書編集で最も広く普及している簡略表記を採用した」と謳っている。

3. 英語発音表記のあり方

(1) 英語発音をめぐる論議の歴史

高梨健吉『英学ことはじめ』¹⁵⁾ は、発音辞典について、次のように述べている。

明治、大正の英和辞書ではウェブスター式の発音表記法が重宝がられていた。しかし大正11年パーマーの来朝を境としてジョーンズの『発音辞典』が広く用いられはじめ、ジョーンズ式発音が勢力を得てきた。……標準発音でなければ正しい発音ではないという考え方は、英米では通用しないということ日本人は理解しようとしなかった。

古くは「メリケン波止場」のように American をメリケンといい、新しくは「上海帰りのリル」のように little をリルとよぶ耳学問のほうがよく通ずるのである。辞書の発音表記も中学校用のものはカナ発音を併用しているようである。「θ」と「ス」、「ル」と「l」「r」の区別ができないならば、カナ発音記号のほうが生徒の負担も少ないというわけである。『斎藤英和中辞典』の旧版はカナ発音であった。

この関連で、『日本の英語教育史』¹⁶⁾ 大村喜吉担当部分で、明治30年台前半の英人教師マッケローと教え

子片山 寛との交流に触れて、以下のように紹介している。

マッケロー (1872—1940) は、日本政府の招聘に応じて、新設の官立外国語学校 (現在の東京外国語大学の前身) に赴任してきた (明治30年) マッケローは、一軒家に (女中の代わりに) 学生片山 寛を同居させた。外国語学校ではマッケローは、文法・言語学・文学・会話・発音などを教えた。なかでももっとも特異なものは発音教授であった・マッケローは日本としては初めて見る彼得意の発音記号 (Phonetic Signs) を用いたのである。

「最初は妙な字を書くもめだなど不思議に思いました」とそのころを回顧しながら片山 寛先生は語っていられる。外国語学校の中でも主事 (後の校長) の神田乃武教授も、英語科の主任の浅田栄治教授も、これまでに見たこともない発音記号には反対であった。これは無理もないことで神田も浅田もともに長いことアメリカで勉強した人だからウェブスター式の区別的発音記号 (Diacritical Marks — 文字の上に付いたり下につけたりする符号) にはなれしたしんでいたであろうが、ほとんど現在の IPA (International Phonetic Alphabet、国際音標文字) に近いマッケローの用いた発音記号には強い抵抗と反

発とを感じたにちがいない。

これに反して学生片山 寛がその教師であるマツケローの信奉する発音記号にひきつけられていったことは容易に想像することができよう。このようにして明治35年片山 寛、R・B・マツケロー共著の『英語発音学』（東京・上田屋書店）は生まれでたのである。

(2) 先達の証言から

1. 岩崎民平先生¹⁷⁾

研究社の『簡約英和辞典』『新英和中辞典』の編者である岩崎民平（1892—1971）は英語音声学からスタートしている。以下、発音記号についての、氏の証言を聞こう。なお、氏も斎藤秀三郎の講義を聴講している。

私たちが旧制中学で英語を習った明治の終わりごろでは、発音はもっぱら imitation によったもので、辞書で表示される発音記号は、いわゆるエブストル式で、普通の spelling に diacritical marks を付けて、a, a, a などのように示されていた。

明治43年東京に出て東京外語の入試を受け授業開始を待っているころ、神田の古本屋で R. B. McKerrow 片山 寛共著『英語発音学』を見つけ

買って来て一気に読み通し、これが英語の音声研究に対する私の eye-opener となった。外語の教室では片山先生に特に phonetics そのものの講義は拝聴しなかったが、教室ではいつも正確な発音の実例を示された。

こうした雰囲気の中で教育されたので、大正2年外語を卒業して東京府立四中の英語教師になった時、教室で発音記号を用いても特に新しがったつもりではなかったのだが、その頃としては珍しかったらしい。Jones の『発音辞典』（1917）が出る4年前である。

2. 岩崎先生と英語音声学

竹林滋氏（英語音声学者）¹⁸⁾が、上記テーマで岩崎先生の考え方、特に最初の著書『英語 発音と綴字』の緒言を紹介しているので、以下に少し示しておこう。「本書で用いた音字は「万国音声学会」の制定にかかるものである。今日わが国に行われている辞典においてまだ余喘を保っているいわゆる Webster 式表音法の著しく複雑不統一なのは誰も異論のないところであろう。

また Webster 式の複雑なのに懲りて日本の仮名を用いて英語の発音を示そうとする企ても近頃見えるようである。この方法もある約束を設けてやれば絶

対に不可能ではないけれど、種々の点から見て概して弊多くして利の少ないのはわが確く信ずるところである」

と述べられて、国際音声学協会制定の音標文字の採用の必要を力説され、またカナ表記に対しても批判を加えられた。音標文字は大正末期から辞典や教科書に登場するわけであるが、その気運の醸成に大きな貢献をなしたのが本書で、わが国における今日のごとき普及はこの本に言及せずしては語れない。

同書は、先生弱冠27歳時の著であり、一種の気負いを感じさせる。たまたま論者は、先生六十路の学生の一人である。

4. カタカナ発音表記英和辞典

恩師岩崎先生のご意見に反することになるかも知れないが、論者は今日、あえてカナ表記の問題に着目してみたいと、思う。というのは、最近是一種のカナ表記復活の時代で、カタカナ発音表記の価値が見直しされているように思えるからである。その根拠にどんな意見があるのか、個別の辞典を比較しながら観察してみよう。

(1) 荒牧鉄雄編『カナ発音英和小辞典』大学書林¹⁹⁾

昭和55年第1版発行。手元にあるのは、平成5年第5版である。総607ページの小型判辞書である。

同辞典「はしがき」原版、71年8月）では、

「……英語の習得には、まづ発音がむずかしいといわれる。それで本書では国際音声記号を利用できない人にも、ほぼ原語に近い発音ができるように、カタカナとヒラガナを工夫した発音カナを併せてつけておいた」として、英国式発音を主体として、国際発音記号（IPA）とカナ表記の双方を示している。発音カナについての説明を以下に引用する。

発音カナ

1. カナ表記 英語の音を示すのに、日本語の音を表わすカナを用いることは不合理なことであるが、発音記号によって正確に発音できるまでの橋渡しとして、一定の約束のもとに、カタカナとヒラガナを発音カナとして用いた。

2. 発音カナはカタカナを主体とし、日本語の音では通じなかったり、間違ったりするときは、ヒラガナで区別して、だいたい次のような約束を設ける。それで、ヒラガナは特に注意すべき音を示すわけで

ある。

「b」音と「v」音を区別するため「v」音には「ヴ」

「h」音と「f」音…「f」音には「ふ」

「r」音と「l」音…「l」音には「らりるれろ」

「s」音と「θ」音…「θ」音には「さすいすせそ」

「z」音と「ð」音…「ð」音には「ざずいずぜぞ」

「j」音には「ジャ、ジ、ジュ、ジェ、ジョ」

「dʒ」音には「ヂャ、ヂ、ヂュ、ヂェ、ヂョ」

3. 「æ」の音は英語特有の音で、「エ」と「ア」を

いっしょにしたような音であるが、これを日本語の

「ア」で代えてしまうと大きな間違いをおこすことが

多いから、特に注意をうながすために、「〈ア〉のよ

うに「ハ」を上につけた。

例：bag [bæg] 〈バッグ〉 — 比較：bug [bʌg] バグ

fan [fæn] ふァン — 比較：fun [fʌn] ふァン

ただし、carry [kæri] キャリ、Shall [ʃæl] シャル

などのように、日本語の音で間に合う場合は「キャ」

「シャ」などを用いた。

4. 長音のしるし「ː」のついた音は、発音カナで

は長音のしるしに「ー」を用いたが、「eː」の音に限

っては、あまり口を開けないというしるしに「ゝ」

を用いて、「アゝ」のように示してある。

5. 以上の発音カナの約束をまとめて、主な語の例をあげてみよう。区別しながらよく慣れてほしい。

bag [bæg] バッグ first [fɜːst] ふァースト

bug [bʌg] バグ fast [fɑːst] ふァースト

breathe [briːð] ブリーズ mad [mæd] メッド

breeze [briːz] プリーズ mud [mʌd] ムッド

carry [kæri] キャリ thank [θæŋk] ヘンク

curry [kæri] カリ sank [sæŋk] ヘサンク

cat [kæt] キャット sunk [sʌŋk] サンク

Cut [kʌt] カット

fat [fæt] ふァット

hat [hæt] ハット

hut [hʌt] ハット

なお、荒牧編には同じく『英和中辞典』（1078ペ

ージ）があるが、これは英音を主に、一部米音を併記

した国際音標文字で発音を示しており、カナ発音辞典

ではない。因みに、論者は生前の氏に二度ほどお目に

かかったことがある。荒牧辞典の特徴は、カタカナ・

ひらがな併用表音にある。

(2)三省堂編修所編『デイリーニューフォニックス英和

辞典』三省堂²⁰

この辞典は携帯用辞典(724ページ)で1995年発行である。内容は一般の英語学習者向けで、発音は全面的にカタカナ発音によっている所が、最大の特徴である。

この点、「はじめに」では、「英語は表音文字のアルファベットでつづられているので、学術的な発音記号を使わなくてもつづり字で読めるはずです。それまでの手掛かりとして日本語のカナによる発音表記を付けました。」とある。ただし、「cの字の発音」[eu, ewの発音]のように、辞書の当該箇所で万国発音記号との関連を示した説明を入れている。また、当初の解説の中で、左記のような同社の「ニューフォニックス40音表」を示している。

1 日本語の「かな」は子音と母音がセットで1つの字になっていて子音だけを発音することはありませんが、英語では子音も母音も独立した単位です。表の子音Ⅰは有声音、子音Ⅱはその無声音、子音Ⅲはその他です。

2 英語の母音字はaeiouの5字ですが、1字1音ではありません。英語の発音は音声記号で単語単位に表記するので、字と音は直接結びついていません。字と音を直接結びつけて表にしたものが「ニューフォニ

ックス40音表」です。いわば英語の「かな」で、パーテストで正誤の判定ができるものです。音質を問題にしないので方言によって書き分ける必要はありません。

3 カナ表記は母音を全部書き分けるように工夫しました。アエやオアのようにこれまでにない表記がありますが、エやアを外すと普通に行われている外来語表記になります。なお、子音は字と音が直接結びついてるのでbとv、lとrなどの書き分けはしません。

4 カナ表記するとき、特に切れ目のある場合を除いて、隣り合う子音と母音をセットにしてカナにします。

綴り字と発音の関係については、小川芳男『図解英語小発音学』²¹⁾、竹林滋『英語のフォニックス―綴り字と発音のルール』²²⁾などで論じられてきた所である。竹林は、「フォニックスとは、英米の小学校などで行われている綴り字の読み方の指導のことです。発音記号を知っているだけでは発音の見当はつきません。」といって、20のルール一覧を示している。(後にRule 1とRule 2を例示する。)

従って、三省堂の考え方は、上級の利用者なら、体感的に英語の綴りは読める筈だという思考を内包して

子音

I	b ブ	d ドゥ*	g グ	j ヂ	v ブ	z ズ	zh ジ	th ズ
II	p プ	t トゥ*	k ク	ch チ	f フ	s ス	sh シ	th ス
III	h ホ	l ル	m ム**	n ン	r ル	w ウ	y イ	ng ング

*語末でド, ト **b, p, mの前でン

母音

I	\bar{a} エイ	\bar{e} イー	\bar{i} アイ	\bar{o} オウ	\bar{u} ユー	\bar{oo} ウー	\bar{ou} アウ
II	\hat{a} アエ	\hat{e} エ	\hat{i} イ	\hat{o} オア	\hat{u} ア	\hat{oo} ウ	\hat{ou} = \hat{u}
III	\hat{a} アー	\hat{o} オー	oi オイ				

付表r付き 注:母音が続くときは [r] を発音する。() 内は母音が続くとき。

I	\bar{ar} エア (エー)	\bar{er} イア (イー)	\bar{ir} アイア (アイ)	\bar{or} = or	\bar{ur} ユア (ユー)	\bar{oor} ウア	\bar{our} アウア (アウ)
II	\hat{ar} アー	\hat{er} = ur	\hat{ir} = ur	\hat{or} オー	\hat{ur} ア～		\hat{our} = \hat{ur}

いると、論者は判断する。『三省堂実用英和辞典』²³⁾も、発音にカナ文字を併用しているのも、頷けるところである。

因みに、英国では、同じ国際音声記号 (IPA) でも、日本の簡略表記 (Broad Transcription) ではなく、異音表記の精密表記 (Narrow Transcription) を使って、正確な発音を示すことに配慮されている。一方、米国の場合は完全に伝統のウェブスター式またはその類型が使われ、ネーティヴにとっては不便を感じない。カレッジレベルの辞書でもIPAは使われていない。三省堂の一連の辞書での英語の綴り字の考えに一脈通ずるものがありそうである。

日本で比較的に見かけられるウェブスター系の辞書は、日本語版編集顧問小川芳男・編集主任斉藤治郎・発音校閲者竹林滋による『ウェブスター英英和辞典』²⁴⁾ 日本ブリタニカ (1972) のみではあるまいか。

この辞典も「発音記号表」をにつけ、関孫母音・子音を使った単語を各3例程度示すウェブスター式であるが、一部の発音が難しいと思われる語には、IPAによる発音を添え

■ Rule 1 ■ (p.18)

子音字のb, d, f, h, j, k, l, m, n, p, r, s, t, v, w, x, y, zは規則的な発音を表す。

b : boy, job	p : park, ship
d : day, sad	r : rice (語頭・語中)
f : five, golf	s : six (語頭・語中)
h : hall (語頭・語中)	t : time, hat
j : jet (語のはじめ)	v : very
k : kiss, book	w : way (語頭・語中)
l : large, feel	x : box (語末)
m : make, room	y : yes (語頭・語中)
n : night, coin	z : zoo, quiz

■ Rule 2 ■ (p.20)

次の二重または三重子音字も規則的に発音される。(同じ発音の子音字があれば=のあとで示してあります)

ch : child, inch	qu=k : queen (語頭・語中)
ck=k : back (語末・語中)	sh : ship, cash
dg=j : bridge (語末)	tch=ch : match (語末・語中)
ng : thing (語末)	th : think, bath
ph=f : photo, graph	

ている。やはり、日本人にとっては、英単語のスペリングから発音を考えるのは、少し無理なのかも知れない。

(3) 若林俊輔『ヴィスタ英和辞典』三省堂²⁵⁾

1997年発行のこの辞典(総1788ページ)は、最新版の「カナ発音」辞典である。しかも、各単語についてカタカナ発音を先に示し、「発音記号」による発音を後に示している。そして、カナ発音について「生徒のみなさんへ」と「先生がたへ」と別個の呼び掛けをしている。

その中で注目すべきなのは、生徒向けでは、「……「カナ発音」は、「発音記号」を使った場合でも同じですが、発音を完全に正しく表すことはできません。発音は、実際の発音を聞いて、これとあわせて「カナ発音」を利用することをおすすめします。」と、IPAが万能ではないことを明示していることで、これは中々いいないことだ。

一方、教師向けには「本辞典での「カナ発音」は、学習者がそのまま読めば、英語にかなり近い音が出せるように、表記にくふうをしました。」とあつさり説明している。ともあれ、論者は色々な意味で本辞典を高く評価したい。

5 最近の論争と今後の展望

(1) 最近の論争

最近、若林俊輔教授(英語教育学、英語授業学、元東京外国語大学、現拓殖大学)の『ヴィスタ英語辞典』のカナ表記をめぐる、島岡丘教授(英語発音表記学会長、元筑波大学、現茨城キリスト教大学)から若干の論争が仕掛けられた。(The English Teachers Magazine August '98 Oct. '98「英語教育」大修館書店)

島岡教授の批判の重点は、氏が唱導している島岡方式に対して、若林方式ではth/s, pl/prなどの区別がないことにあるようだ。そして、「カナ表記の価値は、日本語を母語する英語学習者が母語にない英語音をどう手助けして出せるようにするか、ということと自信が持てる英語の発音をどう可能にするか、ということに関係する」と論ずる。

結局、氏が進めてきた「近似カナ表記」、「最適カナ表記」から「標準的カナ表記」への道を推奨するのである。

これに対し若林教授は、島岡教授に個別に答える代わりに、「ところで、島岡氏に確かめたいのは、「カナ

発音表記」が英語音を表現できる、と考えられるのかどうかということである。『ヴィスタ英和辞典』は、そのような考え方は採用していない。」と述べている。これには、やや問題がありそうだ。

若林氏自身、「生徒のみなさんへ」の中で、「発音は、実際の発音を聞いて、これとあわせて「カナ発音」を利用することをおすすめします。」(傍線は論者)といっているところだ。誰もが、これで発音が上達するのだと、論者は考える。

若林氏は「おわりに」で、「基本的なことだが、「カナ発音表記」は単なる補助手段にすぎない。「発音記号」についても同じである。」と自説を強調している。これは島岡方式への間接的な批判なのかも知れないが、次の「私は……20年以上「英語音声学」の授業を担当したのだが、「発音記号」をきちんと読める新入生に出会ったことがない。」のくだりには、ちよつと引掛かる。

同氏は長年、語学教育研究所等で中高教師や生徒の指導に当たられ、現場の実情に最も詳しい方である。今日、導入期の英語授業で英語発音の時間が如何に保証されていないかは、篤と承知の筈である。だから、十年の余をかけて『ヴィスタ英和辞典』が創られたのであり、また世間で、より実践的で簡明な英語発音テキストが求められているのではなからうか。

論者は神奈川大学で、3年生にビジネス英語と英書講読を教えているが、学生の英語発音はイントネーションを含めて心細い者が大部分だが、2年次の短期(1か月)留学(英語圏)経験者は英語発音について顕著な上達を示している(教師の側で、ちよつと発音を聞くとすぐ分かる)。一方、英語の5文型が分かってない学生も少なくない。

(2) 今後の展望

論者が東京外語にあつて、アルバイトから就職までお世話頂いた恩師・小川芳男先生(英語発音学・英語教育法)は、多数の辞書編纂にかかわられ、また『ハンディ語源英和辞典』を編まれている。先生には晩年までお付き合いを頂き、御著²⁶から「英語と日本語の音声的相違」について、小著²⁷に要約引用することをお認め頂いた。(下記)

1. 日本語のアクセントは、pitch accent (音の高低のアクセント)であり、共語はstress accent (音の強弱のアクセント)である。

2. 日本語はそれぞれの音節 (syllable) が等間隔で同じ長さを持ち、英語のようにアクセントのある音節が強く長く発音されることはない。

(例) 高い II た・か・い

英米人が発音すると、たいてい「た・かー・い」と、「か」を伸ばして強くアクセントをつける。

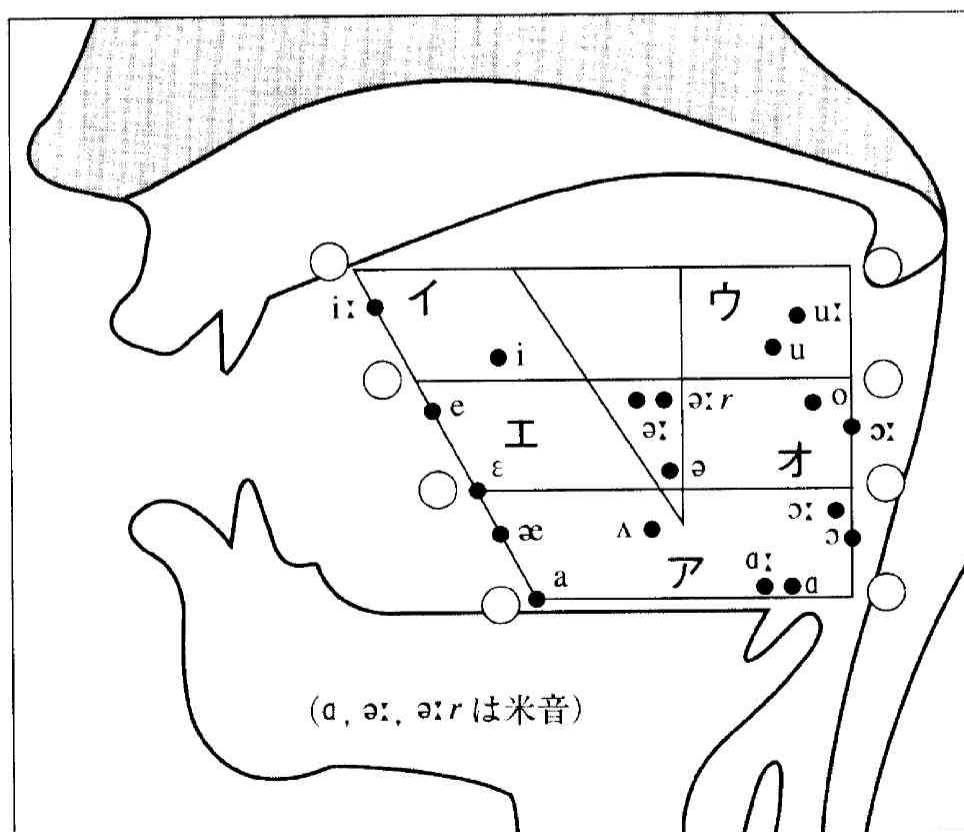
3. 英語にあつて日本語にないものは、リズム、つまり sentence stress である。このリズムの強弱が上手にできると、英語らしく聞こえる。

専門的な言葉で言うところ、英語は「強勢単位のリズム」(stress - timed)であり、日本語は「綴り単位のリズム」(syllable - timed)である。

4. 文章全体の抑揚（イントネーション）の相違を比べてみると、日本語は平板である。一方、英語は強弱があり、特に文尾に強勢がくるのが特徴である。英語の場合はストレス（強弱）を中心とした話し方を身につける必要がある。

5. 日本語では、同じ音でも長音と短音で意味が違
う（オバサンとオバーサン、トケイとトーケイ）。す
なわち、音量が意味を決定する。英語の場合は、意
味を決定するのは音質で、音質が同じなら音量によ
って意味は変わらない。

6. 日本語では「ン」が1つのシラブルを形成するが、英語ではnは子音であり、音節を形状しない(ケンコー||4シラブル)。日本語では促音が1つのシラブルとなっており、多くの外国人にとって「売った」と「歌」の発音の区別は困難である。



次は、梶木隆一『英語の基礎』²⁸⁾に示された、英語と日本語の母音の発音位置の相違を図式化したものである。

この図を見ると、英語と日本語の母音の相違がよく分かる。論者は、英語発音の上達のために、英語と日本語の音声的相違を知ることが大事だと主張したい。関東学院大学の御園和夫教授は『英語音声学研究―理論と応用―』²⁹⁾の中で、「日本語の国語学の音韻論では、ふつう、「音節」と称するものを「モーラ」という単位を用いている人もいる。「モーラ」(mora)とは音節の長さを測る単位で、ふつう、短母音1つを含む短音節の長さが1モーラであり、長母音1つを含む長音節の長さは2モーラとなる、と解説している。

英日音の長さの比較については、論者は理論的にも実験的にも説明する能力を欠いているが、経験的には一つの実践例を持っている。というのは、論者のゼミに所属している中国人留学生に、「あなたの日本語は、「ン」という音と長音の「ー」をもっとのばすようにすると、ずっと良くなりますよ」と注意していたが中々直らなかった。ところが、就職内定先で仕事をするようになって、日本語発音が顕著に上達したのである。

若林方式によれば、これは多分、実際の発音を聞いて

てそして自ら使ってみての結果と想定される。東北人の曖昧母音の「え」(論者もその一人だが、未だに「いい映画を見た」では訛ってしまう)や「マレーシア人は同国人が飛行機の中で英語を話していると、すぐ分かる」という現象(訛りは国の手形などの事例)は、自国語の発音と英語の相違を認識することが、英語発音の上達につながる可能性を示唆している。論者は、「英語と日本語の音声的相違」について、もっと注目されるべきであると主張したい。

この問題は、同時に、国内外の日本語教授法のみならず、非英語母語諸国での英語発音の研究にも資するものがあるう。

おわりに

本文では触れられなかったが、コンサイス英和の佐々木達先生は、論者のゼミ・卒論の指導教官であり、斎藤秀三郎伝の大村喜吉先生は、論者が在学中、語劇のプロデューサーとして、ご自宅に寄付をお願いに伺った経験がある。考えてみると、この論文は英語辞書学の泰斗であり、英語辞典実作者の恩師達の導きによって、作られたようなものである。記して感謝の意を

表したい。

英語のカタカナ発音表記の価値については、英語の綴り字との関係で、従来以上の評価をすべきだろう。また、特に英語初級者あるいは上級者それぞれにカナ発音の価値があり、大学受験者ないしは大学低学年者などの中級者にとっても利便性が高く、記憶の助けにもなるなど、積極的に取り入れる価値がありそうだ。論者としても、構想中の特殊英和辞典の目玉として、カナ表記活用に自信を深めることが出来た。

主要参考文献

I 英語辞典関係

- (1) 日外アソシエーツ『辞書・事典全情報』45/89、紀伊国足書店、1990。
- (2) 林哲郎『英語辞書発達史』開文社、1968。
- (3) 今里智晃・土家典生『英語の辞書と語源』大修館書店、1984。
- (4) 山岸勝堂『英語教育と辞書』三省堂、1997。

II 英語発音関係

- (1) 小川芳男・竹林滋『図解英語小発音学』新訂増補版、有精堂、1979。
- (2) 竹林滋『英語のフォニックス』ジャパンタイムズ、

1981。

- (3) 御園和夫『英語発音学序説』和広出版、1995。
- (4) 根間弘海『英語の発音とリズム』開拓社、1996。

注

- 1) McCarthy, Michael, Vocabulary, Oxford University Press, 1990, 86—87°
- 2) 日本英学史学会編『英学事始』エンサイクロペディアブリタニカ、1976°
- 3) 村上英俊『三語便覧』達理堂、1854°
- 4) 小林亥一『文久三年御蔵島英語単語帳』小学館、1998°
- 5) 同上書、173ページ以下参照°
- 6) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館、1991°
- 7) J. C. ヘボン『和英語林集成』1867°
- 8) 堀達之助『英和对訳袖珍辞書』1862°
- 9) 橋本光憲『経済英語英和活用事典』日本経済新聞社、1991°
- 同前『英和金融用語辞典』ジャパンタイムズ、1995°
- 同前『英文ビジネスレター文例大辞典』日本経済新聞社、1995°
- 同前『戦後における実用英語辞典の発展—ユーザ

ーとして制作者としてー

神奈川大学経営学部「国際経営論集」第10号、1996・2

10) 斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』正則英語学校出版部、1915。

11) 大村喜吉『斎藤秀三郎伝』吾妻書房、1960。

12) 市川・柳・飯島共著『富山房大英和辞典』富山房、1931。

13) 岡倉由三郎『新英和第辞典』研究社、1927。

14) 小西友七、他『ランダムハウス英和大辞典』小学館、1973。

15) 高梨健吉『英学ことはじめ』角川書店、1965。

16) 高梨健吉・大村喜吉『日本の英語教育史』大修館書店、1975。

17) 岩崎民平『岩崎民平文集』研究社、1985。

18) 竹林滋、同上書、469-470。

19) 荒牧鉄雄『カナ発音英和小辞典』大学書林、1980。

20) 三省堂編修所編『デイリー ニューホニックス英和辞典』三省堂、1995。

21) 小川芳男『図解 英語小発音学』新訂増補版、有精堂、1979。

22) 竹林滋『英語のフォニックス』ジャパンタイムズ、

1981。

23) 三省堂編修所編『三省堂実用英和辞典』、1994。

24) 小川芳男・斎藤次郎『ウエブスター英英和辞典』日本ブリタニカ、1972。

25) 若林俊輔『ヴィスタ英和辞典』三省堂、1997。

26) 小川芳男『英語の教え方』サイマル出版会、1982。

27) 橋本光憲『銀行マンの英会話』日経文庫、1987。

28) 梶本隆一『英語の基礎』旺文社、1957。

29) 御園和夫『英語音声学研究』和広出版、1995。